

中耳炎やとびひなど、よくある子供の病気が治りにくくなっている。抗生物質の効かない菌によるものが多くなり、中耳炎で入院する子供も増えているという。風邪に安易に抗生物質が処方されていることが原因の一つとされ、外来小児科学会は抗生物質使用のガイドラインを作成した。(佐藤好美)

抗生物質

効かない子供たち

7割の子供から

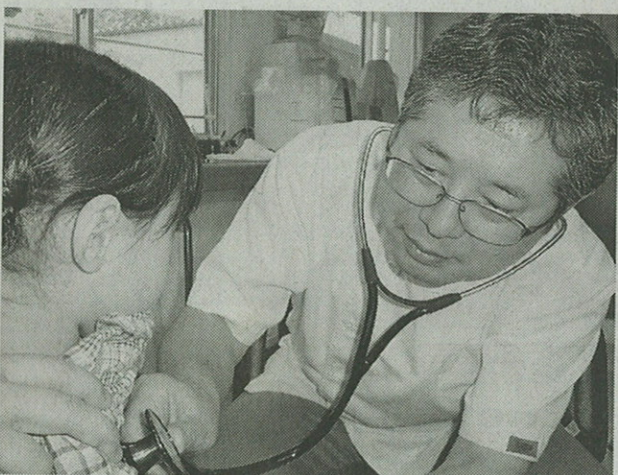
埼玉県のある母親は八月、子供が耳だれ、鼻づまりと湿疹をおこしていたので、近くの診療所に連れて行った。顔や背中がまだらに赤く、乳幼児湿疹と診察された。いったん帰宅するが、翌日に発熱、心配になって耳鼻科を受診したが、よく説明してもらえず、午後、再度、別の診療所にかかった。

「この子を診察したくさかり小児科」(同県所沢市)の草刈章医師は、「体がまだらに赤くなっており、黄色ブドウ球菌をうたぐった」という。予想通り、上咽頭で、いくつかの抗生物質に耐性のある黄色ブドウ球菌が見つかった。「子供から抗生物質の効かない耐性菌が見つかるのは、もう珍しくない」と、草刈医師はいう。

「抗生物質で子どもの病気が治せない」の著者で、仙台市で「いらさわ小児科」を開く寺沢政彦院長は「一昨年から昨年にかけて、診療所にきた六十七人の子供の細菌培養検査をした。主な原因菌である「肺炎球菌」が検出された三十五人のうち、ペニシリンが効かなかったり、効きにくい菌が七割の子供から見つかった。」

必要な風邪3%

安易な処方耐性菌増加



「風邪にむやみに抗生物質を出さない、求めないが大切」という草刈医師
—埼玉県所沢市

抗生物質 感染症を引き起こす原因となる細菌を殺したり、細菌の繁殖を抑える。イギリスの細菌学者、フレミングがアオカビからブドウ球菌を殺す物質を発見し、ペニシリンと名づけた。その後、アメリカで大量生産され、第二次大戦中にはその画期的な効果から「魔法の弾丸」と呼ばれた。現在はペニシリン系、セフェム系、マクロライド系などがある。日本では効果が広範で、子供も飲みやすいセフェム系が多用されており、これが耐性菌の増加と相関があるとみられている。

生活の中で得たものだ。幼稚園や保育園などで集団生活をしている子供に多い。原因の一つに挙げられるのは、風邪などに安易に処方される抗生物質だ。ほとんどの風邪はウイルスが原因で、抗生物質は効かない。しかし、風邪で熱のある子供が診療に訪れた場合、「95-100%の患者

に抗生物質を処方する」とする医師は四割にも上る。こうして、「肺炎予防」に、念のため、処方される抗生物質は、耐性菌の抵抗力を強め、菌を増加させる。順天堂大学の平松啓一教授(細菌学)は「抗生物質が必要なのは風邪の3%程度。肺炎など、二次感染を起こしたときに使えばいい」という。

医師の姿勢重要

抗生物質の安易な使用を止めようと、全国約千三百の開業小児科医らでつくる「外来小児科学会」のワーキンググループは八月、抗

「念のため投与」避けて大病に備え

生物質使用のガイドラインを発表した。風邪や中耳炎、咽頭炎、原因不明の発熱などについて、海外の治療ガイドラインを踏まえ、基本的な治療方針を示した。

指摘されているのは検査、経過観察の重要性だ。「念のため」の処方もなくすには原因の特定と、二次感染に備えた観察が重要だからだ。

ガイドライン作成に携わった草刈医師は「抗生物質を処方しないためには、親にきちんと説明して納得してもらわなければならない。医師が説明を面倒くさがることに一番の問題がある」と話す。

平松教授は「検査を大切にし、患者と医師が連携し、具合が悪いままなら当日の午後には再診もしようという姿勢は歓迎すべきもの。『六歳以下の子供は年に七回、風邪をひく』といわれる。家で水分補給をしながら看病したほうが免疫ができて体も強くなる。大きな病気をしたときに抗生物質が効くように、耐性菌のついていない状態で成長させてあげることが大切」と話している。